

GOD WITH US

Part 1: The Great Blessing
Genesis – Deuteronomy
March 7 & 8, 2015

Message 4 – The Promise continues through
Isaac and Jacob
Genesis 25: 12-36:43

神は我らと共に

パートI：大きな祝福
創世記一申命記

第四メッセージ – イサクとヤコブを通して続く約束
創世記 25 : 12 – 36 : 43

はじめに

創世記半ば、神に選ばれた血統であるイサクからヤコブへと世代が移る頃、神のアブラハムとの約束（創世記 12 : 1 – 3）の経過をたどっている。神はアブラハムの種によって、全世界を祝福されるために用いられる国家を築かれるという契約を果たされる。しかし、アブラハムの子孫は、アブラハムと同じレベルの信仰と従順さを保たなかった。次の世代の霊的献身において深刻な劣化が生じる。それにもかかわらず、神はその民が不忠実なときであっても、忠実であられた。神は、たとえ誤りを犯しがちな人間とねじれた状況を用いてでも約束を守られるお方である。

イシュマエルとイサクの息子たち： 25 : 12 – 28

アブラハムの物語は、イシュマエルとイサクの二人の息子が主要である。この物語は、アブラハムの死に、両息子が父親を葬る場面から取り上げている（25 : 9 – 11）。また、イシュマエルの12人の息子が挙げられ（25 : 12 – 18）、イシュマエルの死が記録されている。イシュマエルとその12部族については、たった7節で説明されている。その反面、物語は、イサクの一生を非常に密接に追っている。その初めの物語が、イサクの2人の息子、エサウとヤコブの誕生についてである。確実に、神の約束は

イシュマエルではなく、イサクを通して前進していることが分かる。

イサクは不妊の妻、リベカのために主に祈った。主はその祈りに答えられ、その夫婦に双子を授けられた。出産の過程から、舞台はヤコブとエサウの継続的な競い合いの設定となる。彼らは子宮内にいた時から格闘していた。出産でヤコブが二番目に生まれてきた際、その手はエサウのかかとをつかんでいた。こうして彼は「ヤコブ」（かかとをつかむ者、もしくは克服者）と名付けられた。物語が進展するにつれ、ヤコブは継続的に彼の兄であるエサウを克服しようとする。神が次のように仰った通りであった：

25:23 主は彼女に言われた、「二つの国民があなたの胎内にあり、二つの民があなたの腹から別れて出る。一つの民は他の民よりも強く、兄は弟に仕えるであろう」。（創世記 25 : 23）

息子たちが成長し、家族は分裂した。イサクは屋外を好む男であるエサウを気に入り、リベカは、おとなしく家の近くにいることを好むヤコブを気に入った。この分裂が、イサクとリベカの家家庭に混乱と心痛を引き起こすが、それもヤコブを通して神のご計画を促進するために用いられることになる。

家庭内の主要なリレーションは、夫と妻の関係でなくてはならない。物語が展開するにつれ、イサクとリベカの間一体感が欠けていることが分かる。霊的・感情的親密な関係が欠ける時、一般的に夫と妻は、リレーションナルのつながりのためのニーズを満たすために、彼らの子供たちと絡まってしまふ。そうなってしまうと、親子と共々長期的に苦しむことになる。

エサウ、長子の権利をヤコブに売る： 25 : 29 – 34

エサウが長子の権利を一食の食事と引き換えにヤコブに与えたということは、ユダヤ人の文脈にも信じ難くショッキングな物語であった。明るい光は長子に属し、父の相続の二重の配分を関与する。また、父は長子に特別な祝福を与えるだけでなく、世帯全体を支配するリーダーシップの特権を与えると推定されていた。したがって古代イスラエルでは、長子の権利を所持するという事は非常に価値があることであった。この物語の最後の節は、重要である：「こうしてエサウは長子の権利を軽蔑したのです。」彼は、長子の権利よりも、一杯のスープの方に価値を置いたのである！反面ヤコブは、長子の権利を手に入れるために手段をいとわなかった。彼は、父から相

続を受けること、また、神聖なる祝福がアブラハムからイサクへそしてイサクの長男に受け継がれるということに価値を置いた。おそらく、リベカが、神はエサウではなくヤコブを祝福されるという約束をヤコブに伝えたであろう。いかなる場合であったとしても、ヤコブは、長子の権利を欲し、それを手に入れた！新約聖書のヘブル人への手紙では、エサウのことを故意に神の祝福を軽蔑し拒否し、我が人生を優先させた者の例としてあげている。

12:15 気をつけて、神の恵みからもれることがないように、また、苦い根がはえ出て、あなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚されることのないようにしなさい。**12:16** また、一杯の食のために長子の権利を売ったエサウのように、不品行な俗悪な者にならないようにしなさい。**12:17** あなたがたの知っているように、彼はその後、祝福を受け継ごうと願ったけれども、捨てられてしまい、涙を流してそれを求めたが、悔改めの機会を得なかったのである。（ヘブル人への手紙 12：15－17）

イサクの保護と繁栄： 26：1－35

このイサクの物語のセクションでは、アブラハムの物語の縮小のように聞こえる。ここで、イサクを通して偉大な国民を築いてくださるという神の約束が二度繰り返される。その間、イサクは自分の身を守るために、ゲラルの王であるアビメレクに、彼の妻が妹であるという嘘をつく。アブラハムと同じ罪を繰り返したのである。父子共々恐れに関して同じ傾向があり、両者ともそれぞれの恐れに対して自己防衛戦略をもって対処した。それにもかかわらず、神はペリシテの領土に住んでいたイサクを祝福された。

26:12 イサクはその地に種をまいて、その年に百倍の収穫を得た。このように主が彼を祝福されたので、**26:13** 彼は富み、またますます栄えて非常に裕福になり、**26:14** 羊の群れ、牛の群れ及び多くのしもべを持つようになったので、ペリシテびとは彼をねたんだ。**26:15** またペリシテびとは彼の父アブラハムの時に、父のしもべたちが掘ったすべての井戸をふさぎ、土で埋めた。（創世記 26：12－14）

明らかに、神の好意はこのアブラハムの息子の上にあった。神の約束は安全である。神は、イサクと共にあられることを望まれた。

26:24 その夜、主は彼に現れて言われた、「わたしはあなたの父アブラハムの神である。あなたは恐れてはならない。わたしはあなたと共にあって、あなたを祝福し、わたしのしもべアブラハムのゆえにあなたの子孫を増すであろう」。 **26:25** それで彼はその所に祭壇を築いて、主の名を呼び、そこに天幕を張った。またイサクのしもべたちはそこに一つの井戸を掘った。（創世記 26：24，25）

ヤコブ、エサウの祝福を盗む： 27：1－46

エサウの祝福を盗むヤコブの物語の詳細と陰謀は実に見事である。まるで現代のメロドラマの一節を読んでいるかのようなのである。リベカには、お気に入りの息子であるヤコブとどのようにして父親の祝福をエサウから奪おうかと策略を練る狡猾さがあった。注意して読んでいくと、この欺きの原動力となったのはリベカであるということが明らかになっていく。リベカは、ヤコブが祝福を盗むために、彼女にできる限りのことをした。イサクの視力が失なわれていたという事実は、その母と息子にとって有利に働いた。だから二人は老体であったイサクが、実際にエサウ（彼のお気に入り）を祝福していると思込ませる方法を企み、実際イサクは取り消し不可能な祝福の言葉を代わりにヤコブの上に発してしまった！

父の祝福がヤコブの上に言明されてすぐ、エサウが戻り、弟が彼の祝福を盗んだことを知ったエサウは恐怖に陥った。イサクは更に恐怖に陥った。**イサクは激しく震えた・・・（27：33）** 彼はだまされたことに言葉にできない程の怒りを覚えた。エサウはか損失に絶望した：

27:34 エサウは父の言葉を聞いた時、大声をあげ、激しく叫んで、父に言った、「父よ、わたしを、わたしをも祝福してください」。 **27:35** イサクは言った、「あなたの弟が偽ってやってきて、あなたの祝福を奪ってしまった」。 **27:36** エサウは言った、「よくもヤコブと名づけたものだ。彼は二度までもわたしをおしのけた。さきには、わたしの長子の特権を奪い、こんどはわたしの祝福を奪った」。また言った、「あなたはわたしのために祝福を残しておかれませんでしたか」。（創世記 27：34－36）

エサウは父に、彼にも同じ祝福を与えてくれるよう懇願した；が主要な祝福を取り消すことは不可能で、イサクは祝福というよりも呪いのような言葉をエサウの上に言明した。エサウの心が弟のヤコブに対する殺意へと傾くと

ここでこの物語は終わる。エサウの殺意を察したリベカは、イサクに花嫁を探す目的でヤコブを遠い故郷である先祖の国へと送ることを提案した。その理由は？彼女はエサウがカナンの地から妻をめとったために、エサウが悲しみをもたらしたように、ヤコブには同じことをしてほしくなかったからである（参照 26 : 35）。リベカは欺くための巧妙なテクニックを心得ていた。どこでその様な技を身に着けたのかを問もなく知ることになる。

神がエバに下された罰は、リレーショナルな領域において痛みを満たされるということであった。彼女は、出産と子育てにおいて大いに苦しみ、また、夫を制御し操作するために苦しむであろう（創世記 3 : 16）。リベカにはその全ての作用が見られる。彼女の胎時は、子宮の中で格闘した。出産後、彼女はお気に入りの息子だけを愛した。息子たちの成長につれ、リベカは将来のことを夫にも神にも信頼することが出来ず、人生を思い通りに動かすために、彼女自身の手でコントロールしなくては気が済まなかった。リベカは、彼女のリレーショナルの面における恐怖を、彼女には理解することが出来ないほど愛してくださっている神の御手に信頼して委ねることができなかった女性の典型的な例である。

イサク、ヤコブを妻探しの旅に送り出す： 28 : 1-22

一見送り： 28 : 1-9

アブラハムの息子、イサクのために妻を探す時が訪れた場面を思い出してみよう。アブラハムは僕に、決してイサクを連れて行ってはならないということを強く警告した（創世記 24 : 5-9）。そして一世代後、イサクが同じ立場にあり：妻を探すために、神聖なる約束の相続人であり実の息子であるヤコブを故郷に送った。アブラハムの信仰を基盤に物事を決定する生き方は、イサクの便宜に基づく妥協へと置き換えられた。第二世代の信仰に劣化が生じている。イサクもリベカも「神に選ばれた息子」を不敬虔に偶像崇拜と欺瞞に満ちた地へと送り出した事実を知っていた。それでも彼らがヤコブを送った理由は、自宅に入りびたり、ヤコブとリベカを絶えず非難するエサウによって彼が殺されないように保護するためであった。

一ベテルにてヤコブの夢の中に主が現れる：28 : 10-22

ヤコブは旅の途中、ベテルに宿泊した。主が夢の中に現れ、新しい世代とともに、神がいてくださるというアブラハムとの約束をヤコブに再確認された。

28:13 そして主は彼のそばに立って言われた、「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが伏している地を、あなたと子孫とに与えよう。 **28:14** あなたの子孫は地のちりのようになくなって、西、東、北、南にひろがり、地の諸族はあなたと子孫とによって祝福を受けるであろう。 **28:15** わたしはあなたと共にいて、あなたがどこへ行くにもあなたを守り、あなたをこの地に連れ帰るであろう。わたしは決してあなたを捨てず、あなたに語った事を行うであろう」。（28 : 13-15）

神は、ブラハムとの約束をお守りになるだけでなく；ヤコブが向かうところどころで彼の安全を守り、約束の土地（15節）に戻らせてくださるということも約束された。ヤコブは、この夢に対してそれは興味深い方法で応答した。彼は祭壇を築き、もしこれらの約束が実現したならば、その時は「神を彼の神とする。」と言う条件付きの誓いをたてた。

28:20 ヤコブは誓いを立てて言った、「神がわたしと共にいまし、わたしの行くこの道でわたしを守り、食べるパンと着る着物を賜い、 **28:21** 安らかに父の家に帰らせてくださるなら、主をわたしの神といたしましょう。 **28:22** またわたしが柱に立てたこの石を神の家といたしましょう。そしてあなたがくださるすべての物の十分の一をわたしは必ずあなたにささげます」。（創世記 28 : 20-22）

この時点でのヤコブの信仰は、まだまだ未熟であった。彼の神と認める前に、神が忠実な方である証拠を必要としたのである。ヤコブがこの土地（ベテル）に戻り、本当に彼自身の神として受け入れられるまでに、この先20年（31 : 8）という長い年月がかかる。

イサクがヤコブを「古い故郷」へ送り返したことについての不敬虔な事実の傍ら、全ての新しい世代は、先祖の信仰に便乗するのではなく、彼ら自身の信仰を開拓しなければならないということも事実である。ヤコブは、神と親密な歩みを

確立し、神の約束の成就を個人的に信頼することを学ばなければならない。次のように言われていることは間違いではない：「神には孫はいない・・・子供だけである。」したがって、約束の地から離れる旅は、最終的には、神へのヤコブ自身の信仰開拓を強制せざるを得ない困難へと突き出される経験となる。地の果ての放蕩息子のように、神は、喜びと目的に満たされるいのちのための唯一の希望であることに気が付く。

ヤコブ、ラバンの家で欺かれる： 29：1－30

ヤコブは欺きの技術を母親のリベカから受け継いだ。今度は、ヤコブが欺きの名人である彼の叔父であり母親リベカの兄弟であるラバンの餌食となる。ヤコブがラバンの家に着いた時、すぐにラバンの次女であるラケルと恋に落ちた。ラケルとの結婚を認めてもらうために、7年間、彼のもとで働くことに同意した。しかし結婚初夜、ラバンは、祝いのごちそうを用意し、彼の天幕にラケルの代わりに、長女であるレアを滑り込ませることに成功した。翌朝、ヤコブは目を覚まし間違った妻が横に寝ていることに気が付いた！彼にとっては良い薬となる体験であった。ヤコブは、祝福を奪い取るために、自分の父親であるイサクを欺いたときのことを思い出しましょう。

29:25 朝になって、見ると、それはレアであったので、ヤコブはラバンに言った、「あなたは どうしてこんな事をわたしにされたのですか。わたしはラケルのために働いたのではありませんか。どうしてあなたはわたしを欺いたのですか」。 **29:26** ラバンは言った、「妹を姉より先にとつがせる事はわれわれの国ではしません。 **29:27** まずこの娘のために一週間を過ぎなさい。そうすればあの娘もあなたにあげよう。あなたは、そのため更に七年わたしに仕えなければならない」。 (29：25－27)

結局、ヤコブはラケルを妻とするために、更に7年間働いた。欺くものは、更に偉大な欺き者の餌食となった。神は嘲笑されているのではない。男は、彼が蒔くものを刈り取る。(ガラテヤ6：7)

妻たちとの戦い： 29：31－30：24

ヤコブとの関係、また、彼の愛と関心に切望する、レアとラケルとの間で深刻な競争へと発展した。このライバル関係は、彼女たちの出産競争というよりも、子供の命名競争へと発展した。レアにもラケルにも母親代って子供を産んだ奴隷がいた。物語はイスラエルの12部族の起源を説明するために設定されているという明白な事実はさておき、ここに非常に悲劇的な人間の物語の展開がある。ラバンの策略によって促されたヤコブの一夫多妻結婚が、その妻たちとの競争、陰謀と傷心をもたらす。レアは評価されていない生活に本当の愛を見出すために努力を重ね続ける。ラケルは彼女の不妊

のために、姉のレアに嫉妬し、夫に怒りを覚えた。彼女も子供を産まないことには、彼女が生きている意味が無いに等しかった。

30:1 ラケルは自分がヤコブに子を産まないのを知った時、姉をねたんでヤコブに言った、「わたしに子どもをください。さもないと、わたしは死にます」。 **30:2** ヤコブはラケルに向かい怒って言った、「あなたの胎に子どもをやどらせないのは神です。わたしが神に代ることができようか」。 (30：1、2)

下に記したのは「レアチーム」対「ラケルチーム」の「スコアカード」である。この息子たちは後のイスラエルの12部族になるにもかかわらず、ラケルの人生の最後に12番目のベニヤミンが生まれるため、ベニヤミンの名前は下のリストに入っていない。(35：16－19)

4対0で、レアチームリード

ルベン：主は、私の悩みを「ご覧になった」。

シメオン：主は、私が嫌われていることを「聞かれた」。

レビ：今度こそ、夫は私に「結びつく」でしょう。

ユダ：今度は「主を褒め称え」ましょう。

4対2で、ラケルチーム、ビルハを通して立ち直る

ダン：神は、私を「かばって」くださった。

ナフタリ：私は、姉と死にもの狂いの「争い」をして勝った。

6対2で、レアチーム、ジルパを通して延長リード

ガド：また一人息子が出来て、なんと「幸運」でしょう。

アシェル：なんと幸せなこと。女たちは、私を「幸せ」と呼ぶでしょう。

8対2で、レアチーム更に得点獲得

イッサカル：神が、私に「報酬」を下された。

ゼブルン：今度こそ、夫は私を「尊ぶ」であろう。

ラケルチームのスコアは8－3で終了

ヨセフ：おそらく主は「加えて」くださるでしょう？

人間の罪と過ちの真ただ中であっても、神のご計画は必ず前進する。しかし神のご計画により、私たちがあずかる祝福の楽しみは、私たちの罪との関係が障害となり妨げられる。ヤコブは、神が祝福を約束してくださった男である；それにもかかわらず、彼の人生が痛みと葛藤で満たされている理由は、神の御心の道から踏み外したからである。神の忠実さは、約束が満たされるということを保証する。しかし、ヤコブと彼の妻たちのわがままは、せっかく約束されている満たしへの路も、心痛、痛みと失望で溢れていくことを保証する。ある古い賛美歌は次のように詩っている：「信頼して従いなさい。イエスにあって幸せになるためには、信頼して従う以外にはどんな方法もないのです。」。「主に身を避けることは、人に信頼することよりも良い。」（詩篇119：8）

神は、ラバンに宿るヤコブを繁栄させた： 30：25－43

叔父の支配下に住んだ14年もの長い労苦の後、ヤコブは、その地を離れ、カナンへ戻りたい思いに駆られた；しかし、ラバンは、双方に利益をもたらすビジネスの契約にヤコブを誘った。ラバンは、神がヤコブの味方に付いているお陰で群れが大いに祝福されたことを知っていた。そこで、彼は彼自身の継続的な利益のために、ヤコブの継続的な成功を利用する方法を模索していた。なぜスター選手を手放せようか？彼は、継続して労働の賃金として、特定の動物をラバンの群れから除いてヤコブの群れに加えることが許されていた。そのお返しに、ヤコブは双方の群れを管理していた。

30:32 わたしはきょう、あなたの群れをみな回ってみて、その中からすべてぶちとまだらの羊、およびすべて黒い小羊と、やぎの中のまだらのものと、ぶちのものを移しますが、これをわたしの報酬としましょう。
(30：32)

その後、ヤコブは、散水穴に縞模様の某を配置する繁殖技を実行した。この方法（当時広く受け入れられていた）は、羊が彼らに与えられた視覚的刺激に応じて再現するだろうという考え方に基づいていた（その縞模様の棒によって、より多くの縞模様、まだら、および斑点のついた羊が生まれた）。この技が適切であるという科学的根拠は無い。ただ、神の祝福を確保するために、ヤコブは未だに、そのような人間的戦略に頼っていたことを示している。ヤコブの群れの繁栄の起因は、ヤコブの馬鹿げた棒の働きなどでは

なく、神の働きであった。この章の最後の一節によって、ポイントが明確になる。

30:43 この人は大いに富み、多くの群れと、男女の奴隷、およびらくだ、ろばを持つようになった。(30：43)

遠く離れた、偽り、辣腕、ごまかしの地であっても、神はヤコブとともにいてくださるといふ約束を果たしてくださっている。

「主の祝福は人を富ませる、・・・」(箴言10：22)

私たちは、いったいどのくらいの頻度で、実際、神から授けられているものを私たちの手柄にしているのでしょうか？モーセは後に、出エジプト世代に、決して祝福を獲得したと思うことがないようにと忠告する。あなたは心のうちに『自分の力と自分の手の働きで、私はこの富を得た』と言ってはならない（申命記8：17）。神からの贈り物を人間の成果と間違えている人間の誇りによる愚かさである（参照：申命記8：11－20）**ダビデ王は、富と正しい精神の模範であった：29:12 富と誉とはあなたから出ます。あなたは万有をつかさどられます。あなたの手には勢いと力があります。あなたの手はすべてのものを大いならしめ、強くされます。・・・29:14** しかしわれわれがこのように喜んでささげることができても、わたしは何者でしょう。わたしの民は何でしょう。すべての物はあなたから出ます。われわれはあなたから受けて、あなたにささげたのです。
(歴代誌第一29：12－14)

ヤコブ、密かにカナンの地へ出発： 31：1－55

ヤコブとラバンの物語の結末を欺きによって迎えるほど、相応しいことは無いのではないのでしょうか！ヤコブは、妻たち、子どもたち、奴隷たち、そして家畜を率いてラバンには報告せず密かにカナンへと出発した。

31:20 ヤコブはアラムびとラバンを欺き、自分の逃げ去るのを彼に告げなかった。**31:21** こうして彼はすべての持ち物を携えて逃げ、立って川を渡る、ギレアデの山地へ向かった。**31:22** 三日目になって、ヤコブの逃げ去ったことが、ラバンに聞えたので、(31：20, 21)

ラケルが土地を経つ途中、父が所有する世帯の偶像を盗んだという詳細をお見逃しなく。ヤハウエ、アブラハムの神、への献身は、リーダーである夫婦の心の内からも損なわれてしまっている。

31:19 その時ラバンは羊の毛を切るために出ているので、ラケルは父の所有のテラピムを盗み出した。（31：19）

アブラハムの子孫にとって、神の恩恵と保護は十分でなかったであろうか？彼らの将来の安全確保のために異教の偶像を持って出ることが必要であったのか？アブラハムとサラの信仰も3代目のヤコブとラケルの世代になると、深刻に悪化していた。

ラバンは、ギレアデ、カナンの地の北部の山地にまで、ヤコブを追いかけてきた。途中、神が夢の中に現れ、「ヤコブと事の善悪を論じないように」と警告された。ラバンは単刀直入にヤコブに質問した：「なぜ私を欺いた・・・」（31：26，27）偉大な詐欺師は負けじであった！ヤコブが世帯の偶像を盗んだ事実を否定（ヤコブは、妻のラケルが盗んだことを知らなかった。）したことに対しても激怒していた。そして、ラバンが偶像を探し始めたとき、この話全体における究極の皮肉、父の探し物である偶像の上に腰を掛けている実の娘が月経周期であると嘘をついて父を欺いた。何という悲惨な父娘であろうか？

31:34 しかし、ラケルはすでにテラピムを取って、らくだのくらの下に入れ、その上にすわっていたので、ラバンは、くまなく天幕の中を捜したが、見つからなかった。**31:35** その時ラケルは父に言った、「わたしは女の常のことがあって、あなたの前に立ち上がることができません。わが主よ、どうかお怒りにならぬよう」。彼は捜したがテラピムは見つからなかった。（31：34，35）

ヤコブはこの20年間ラバンに仕えてきた間、彼に利用され続けてきた事実を激しく主張した。彼らは最終的に、契約儀式（31：43-5）によって彼らの意思を正式にし、お互いから離れることに同意した。

リベカがヤコブを妻探しの旅に出したとき、短い期間で戻ってくると思っていました：子よ、今わたしの言葉に従って、すぐハランにいるわたしの兄ラバンのもとに逃れ、あなたの兄の怒りが解けるまで、しばらく彼の所にいなさい。兄の憤りが解けて、あなたのした事を兄が忘れるようになったとき、

私は人をやって、あなたをそこから迎えましょう。どうして、わたしは一日のうちにあなたがた二人を失ってよいのでしょうか」（27：43-45）。物事を自分たちの手の中でコントロールし、解決させられると思う時（神の御心を求めることを怠って）、我々は、偉大な失望に向けて、自分自身を設定することになる。聖書には、リベカの死についての記述が無い；しかし、彼女は再び彼女のお気に入りの息子に会うことがなかったようである。リベカは、彼女自身の力に頼って、人生をコントロールしようとした。彼女は最後まで、神のご計画、規定や保護に頼ったことがなかったようである。

ヤコブ、エサウに再会する準備を整える；神と格闘する：32：1-32

ヤコブが彼の疎遠になっていた兄、エサウに従事する準備をしているとき、エサウの怒りを恐れた。20年が経過しても；エサウは長子の権利と祝福を奪われた復讐のために屈曲しヤコブを殺そうとしていると思いついていた。そしてどのようにしてエサウに会い、対立した場合の脱出計画も踏まえた作戦を練り始めた。攻撃された場合に、幾らかでも逃げられるように、ヤコブは家族をいくつものグループに分離しただけでなく、次々と。（波のように）家畜や他の物品を先に届けさせて、大規模な親善を提供した。ヤコブは、兄の心を和らげることを願っていた。ヤコブは、神の約束に基づいて、神の支持を祈った。

32:9 ヤコブはまた言った、「父アブラハムの神、父イサクの神よ、かつてわたしに『おまえの国へ帰り、おまえの親族に行け。わたしはおまえを恵もう』と言われた主よ、**32:10** あなたがしもべに施されたすべての恵みとまことをわたしは受けるに足りない者です。わたしは、つえのほか何も持たないでこのヨルダンを渡りましたが、今は二つの組にもなりました。**32:11** どうぞ、兄エサウの手からわたしをお救いください。わたしは彼がきて、わたしを撃ち、母や子供たちにまで及ぶのを恐れます。**32:12** あなたは、かつて、『わたしは必ずおまえを恵み、おまえの子孫を海の砂の数えがたいほど多くしよう』と言われました」。（32：9-12）

その夜、ヤコブは、彼の人生の中で最も重要な神との出会いを体験した。彼は、文字通り神と格闘した。（32：24-32）

32:24 ヤコブはひとりあとに残ったが、ひとりの人が、夜明けまで彼と組打ちした。**32:25** ところでその人はヤコブに勝てないのを見て、ヤコブのものつがいにさわたので、ヤコブのものつがいが、その人と組打ちするあいだにはずれた。**32:26** その人は言った、「夜が明けるからわたしを去らせてください」。ヤコブは答えた、「わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去らせません」。**32:27** その人は彼に言った、「あなたの名はなんと言いますか」。彼は答えた、「ヤコブです」。**32:28** その人は言った、「あなたはもはや名をヤコブと言わず、イスラエルと言いなさい。あなたが神と人との、力を争って勝ったからです」。**32:29** ヤコブは尋ねて言った、「どうかわたしにあなたの名を知らせてください」。するとその人は、「なぜあなたはわたしの名をきくのですか」と言ったが、その所で彼を祝福した。**32:30** そこでヤコブはその所の名をペニエルと名づけて言った、「わたしは顔と顔をあわせて神を見たが、なお生きている」。
(32:24-30)

ヤコブの人生は、神の祝福を手に入れるための長い苦闘であった。彼は生まれて以来、今日まで、神とも、人とも格闘し続けてきた。彼の新しい名前「イスラエル」とは、「神に抵抗する者」を意味する。これは蹴ったり叫んだりしながらもたらされた男のイメージである。その結果、ヤコブは、陰謀を企てる者から、神の祝福の勝利を収めた者へと変えられた(Moody Bibleによる解説、p 94)。約束の地に入ろうとしていたイスラエルの民(私たちにとって)、ここでのメッセージは明確である：自力で勝利を得るために努力するのではなく、私たちが謙虚に神に依存するとき、勝利は訪れる。

ヤコブの時代から約1000年後、イスラエル国家が圧倒的な抑圧者から脱出するための戦略を練り上げようとしているときに、預言者イザヤは、彼らに、神に頼ることの重要性を主張した：主なる神、イスラエルの聖者はこう言われた、「あなたがたは立ち返って、落ち着いているならば救われ、穏やかにして信頼しているならば力を得る」。しかし、あなたがたはこの事を好まなかった。かえって、あなたがたは言った、「否、われわれは馬に乗って、とんで行こう」と。それゆえ、あなたがたはとんで帰る。また言った、「われらは速い馬に乗ろう」と。それゆえ、あなたがたを追う者は速い。(イザヤ書30:15-16) エデンの園での出来事以来、悪魔から人類へつき続けている不屈の嘘は、私たち人間は神から離れて生活ができるということである。したがって、この世には2種類のタイプの人がある：神に「神の御心が行われますように。」と祈る人。そして神から「あなたの心の思う通りにしなさい。」と言われる人である。

ヤコブ、エサウと再会する： 33:1-20

心配に心配を重ね、作戦を練った末、ヤコブが心配したエサウとの再会は起こらなかった。エサウは、とっくに乗り越えた様子で、弟に友好的であった。エサウは、これらの全ての贈り物の群れが先に送られてきたのはなぜかと問うた。兄弟は、平穏に分かれた後、ヤコブは、カナンのある中心にあるシェケムの町へ移った。

ディナのレイプとヤコブの息子たちへの復讐： 43:1-31

シェケムに到着したとき、シェケムの若い王子(シケムという名)がヤコブの娘、ディナをみて自分のものにしたいと望み、まず彼女を性的に強姦してから結婚を求めた。ヤコブの息子であり、ディナの兄弟たちはシェケムに激怒した。妹をシケムの妻に与える振りをしながら、村全体を皆殺しにする計画を立てた。(欺きのパターンは衰えることなく続いていた。) 彼らは、平和を装い、シェケムの男たちが「兄弟」になるための割礼の儀式を受けるように願った。悲しく、皮肉なことに、彼らの欺きの手段に、神との契約関係の神聖な象徴である割礼を利用した。三日目、シェケムの全ての男たちが痛みを覚えているときに、シメオンとレビは、町にやって来て男たちを全員殺した。そうして彼らはその町を略奪した。

34:27 そしてヤコブの子らは殺された人々をはぎ、町をかすめた。彼らが妹を汚したからである。**34:28** すなわち羊、牛、ろば及び町にあるものと、野にあるもの、**34:29** 並びにすべての貨財を奪い、その子女と妻たちを皆とりこにし、家の中にある物をことごとくかすめた。(34:27-29)

この物語の趣旨は、アブラハムの子孫が、国家の「偉大な祝福」となるどころか、土地の住民が恐れるテロ組織のような存在になってきていた実状であるように考えられる。ヤコブかそのことについて指摘した。

34:30 そこでヤコブはシメオンとレビとに言った、「あなたがたはわたしをこの地の住民、カナンびととペリジびとに忌みきらわせ、わたしに迷惑をかけた。わたしは、人数が少ないから、彼らが集まってわたしを攻め撃つならば、わたしも家族も滅ぼされるであろう」。(34:30)

次章以降、この小さなメモ書きの考えが強まる：そして彼らは、いで立ったが、大いなる恐れが周囲の町々に起ったので、ヤコブの子らのあとを追う者はなかった。（35：5）

ヤコブ、ベテルに戻る： 35：1-15

ベテルは、この物語の始めの頃、エサウから逃亡中のヤコブに神が現れた場所であり、ヤコブの人生において最も重要な場所であった。また、この場所は、ヤコブが神に条件付きの愛を誓った場所でもある。次のようなことを本質的に述べて：安らかに父の家に帰らせてくださるなら、主をわたしの神といたしましょう。（参照：28：20-22）今度は、神がこの場所にヤコブを呼び戻された。それは神から、ヤコブ自身の完全な信仰を断言するというヤコブの使命である。

35:1 ときに神はヤコブに言われた、「あなたは立ってベテルに上り、そこに住んで、あなたがさきに兄エサウの顔を避けてのがれる時、あなたに現れた神に祭壇を造りなさい」。**35:2** ヤコブは、その家族および共にいるすべての者に言った、「あなたがたのうちにある異なる神々を捨て、身を清めて着物を着替えなさい」。**35:3** われわれは立ってベテルに上り、その所でわたしの苦難の日にわたしにこたえ、かつわたしの行く道で共におられた神に祭壇を造ろう」。**35:4** そこで彼らは持っている異なる神々と、耳につけている耳輪をことごとくヤコブに与えたので、ヤコブはこれをシケムのほとりにあるテレピンの木の下に埋めた。（35：1-4）

悲しいかな、この時点にあっても、ヤコブはその一族に「外国の神々を片付けなさい。」と戒める必要があった。それから、ヤコブはその偶像を櫪の木の下に埋めた。偶像崇拝の実践など、とっくの昔に、アブラハムの約束の偉大なる相続人の人生からは片付けられていることを期待した；がそうではなかった。ヤコブの妻のラケルでさえ、父親の偶像を持ち出した。それにもかかわらず、神によってアブラハム、イサクへと伝えられた約束は、今、ヤコブに繰り返し伝えられた：

35:11 神はまた彼に言われた、「わたしは全能の神である。あなたは生めよ、またふえよ。一つの国民、また多くの国民があなたから出て、王たちがあなたの身から出るであろう」。**35:12** わたしはアブラハムとイサクとに与

えた地を、あなたに与えよう。またあなたの後の子孫にその地を与えよう」。（35：11-12）

神は、ヤコブの名前が「イスラエル」（神に抵抗する者）に変更されていることを再確認され、ヤコブは、その場所を、ベテル（神の家）と名付けた。

ベニヤミンの誕生；ラケルの死： 35：16-21

ヤコブが一族とバズレヘムに向かって旅をしている途中、彼の妻、ラケルが2番目の息子を産み、これでヤコブの息子の合計人数は、12人になった（イスラエルの12部族）。ラケルは、私の悲しみの子、を意味する「ベン・オニ」と名付けた息子を産んで死んだ。ヤコブはこの特別な息子に、私の右腕の息子、という意味の「ベニヤミン」と名を付け直した。ヤコブの最愛なる妻であったラケルの2人の息子は、疑いなくヤコブのお気に入りの子と物語は展開していく。

ヤコブの12人の息子とイサクの死： 35：23-29

明確にするために、ここでヤコブの息子たちを再びあげている。結局この12人の息子たちが、アブラハム、イサク、ヤコブに約束されたイスラエルの12部族を形成する。イサクは、この物語に殆ど登場しなかったため、とっくの昔に死んでいたと思った読者もいるのではないのでしょうか？ここで、イサクの死が記されていることに驚かずにいられない。イサクの妻、リベカの死については、聖書に記されていないので、すでに死んでいると予想するしかない。要するに、物語の観点から、ヤコブと12人の息子の物語は、ずっと短かったヤコブの父親イサクの物語よりも、はるかに重要であったということは明確である。

ヤコブの物語の最後に不道徳的行為に関わる、長男ルベンについての奇妙な聖句が気になる。

35:22 イスラエルがその地に住んでいた時、ルベンは父のそばめビルハのところへ行って、これと寝た。イスラエルはこれを聞いた。さてヤコブの子らは十二人であった。（35：22）

この出来事も、また、アブラハムの4代目における信仰劣化を現すものであった。ルベンの父親に対する罪の大胆な行為を懸念して、ここでマシュー・ヘンリーの解説から優れたコメントを引用：

「このような忌まわしい邪悪な罪は、重罪であり、使徒も次のように言っている。(コリント人への手紙第一5:1) しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのこと。

この事件は、イスラエルがその土地に住んでいたときに起こったことと言われているが；そのとき、まるでイスラエルは家族の中に不在であったかのような状況であったと考えられ、その不幸なケースによって生じた狂った不調である。おそらくビルハは、最も大きな犯罪者であった。また、そのためにビルハはヤコブにより捨てられた可能性が高い、さらに、ルベンはその挑発的犯罪行為のために、長子の権利と祝福を失った(創世記49:4)。長子であることが、常に最良とは限らず、また最も有望であるとも限らない。これは、ルベンの罪であったが、ヤコブの苦悩でもあった。苦悩の悲痛感が次の短いフレーズに込められている：「イスラエルはそれを聞いた」。それ以上の言葉は無く、それで十分であった。彼はこれ以上無い、悲しみと恥、恐怖と不快をもってそれを聞いた。ルベンは自分の犯した罪を父が知ってはいけないと思い、隠そうと考えたが、罪の秘密を守ると約束する者たちは、一般的に失望に終わる；空を飛ぶ鳥たちが真実を運び告げる。

エサウの子孫： 36：1－43

創世記36章はエサウの子孫を説明している。ヤコブの子孫が植民した地(イスラエル)の南、エドムの領土にエサウが植民した。エドム人はイスラエルの長い歴史の中で極めて歴史的重要な民族である。旧約聖書の預言書のひとつであるオバデア書は、具体的にエドム人に宛てて書かれている。

36章では、セイルの息子たちも挙げられている。それらはエサウの子孫ではないが、彼らもエドムの地に居住しており、エサウの子孫と結婚によって混ざったはずである。

ヤコブの物語は、神の祝福が合法的に引き継がれる可能性がある二人の息子を提示している：ユダ(レアの息子；彼女の最初の3人の息子は、恥ずべき不従順な行為によって神の権利を取り上げられた)とヨセフ(ラケルの長子)。次の物語の中で、ヨセフが断然主要な人物となる中、神の究極の祝福が受け継がれたのはレアの息子であったことに驚かずにいられない。ユダの

家系からイエス・キリストはお生まれになった！神の道とはなんと予想不可能であろうか！究極の最高の祝福は、愛されていないと思った女性を通じて世に到来した・・・